

主 題：不安の中に輝く確かな知恵④

聖書箇所：詩篇 37篇30-40節

テーマ：心を騒がせるようなものが周りにあふれる中で、みことばの知恵に頼って生きていく

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは詩篇37：30-40です。これまで私たちは3回にわたって「不安の中に輝く確かな知恵」を、この詩篇から学んできましたが、それも今回で最後になります。まずきょうは今までの振り返りも兼ねて、この詩篇すべてを読みたいと思います。それぞれ学んだ内容を思い出しながら追ってみてください。

詩篇37篇 ダビデによる

「:1 悪を行う者に対して腹を立てるな。不正を行う者に対してねたみを起こすな。:2 彼らは草のようにたちまちおれ、青草のように枯れるのだ。:3 【主】に信頼して善を行え。地に住み、誠実を養え。:4 【主】をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。:5 あなたの道を【主】にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。:7 【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。:8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。:9 悪を行う者は断ち切られる。しかし【主】を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。:10 ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。:12 悪者は正しい者に敵対して事を図り、歯ぎしりして彼に向かう。:13 主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。:14 悪者どもは剣を抜き、弓を張った。悩む者、貧しい者を打ち倒し、行いの正しい者を切り殺すために。:15 彼らの剣はおのれの心臓を貫き、彼らの弓は折られよう。:16 ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにかさなる。:17 なぜなら、悪者の腕は折られるが、【主】は正しい者をささえられるからだ。:18 【主】は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。:19 彼らはわざわいのときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。:20 しかし悪者は滅びる。【主】の敵は牧場の青草のようだ。彼らは消えうせる。煙となって消えうせる。:21 悪者は、借りるが返さない。正しい者は、情け深くて人に施す。:22 主に祝福された者は地を受け継ごう。しかし主にのろわれた者は断ち切られる。:23 人の歩みは【主】によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。:24 その人は倒れてもまさかさまに倒されはしない。【主】がその手をささえおられるからだ。:25 私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。:26 その人はいつも情け深く人に貸す。その子孫は祝福を得る。:27 悪を離れて善を行い、いつまでも住みつくようにせよ。:28 まことに、【主】は公義を愛し、ご自身の聖徒を見捨てられない。彼らは永遠に保たれるが、悪者どもの子孫は断ち切られる。:29 正しい者は地を受け継ごう。そして、そこにいつまでも住みつこう。:30 正しい者の口は知恵を語り、その舌は公義を告げる。:31 心に神のみおしえがあり、彼の歩みはよろけない。:32 悪者は正しい者を待ち伏せ、彼を殺そうとする。:33 【主】は、彼をその者の手の中に捨ておかず、彼がさばかれるとき、彼を罪に定められない。:34 【主】を待ち望め。その道を守れ。そうすれば、主はあなたを高く上げて、地を受け継がせてくださる。あなたは悪者が断ち切られるのを見よう。:35 私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野生の木のようにはびこっていた。:36 だが、彼は過ぎ去った。見よ。彼はもういない。私は彼を捜し求めたが見つからなかった。:37 全き人に目を留め、直ぐな人を見よ。平和の人には子孫ができる。:38 しかし、そむく者は、相ともに滅ぼされる。悪者どもの子孫は断ち切られる。:39 正しい者の救いは、【主】から来る。苦難のときの彼らのとりでは主である。:40 【主】は彼らを助け、彼らを解き放たれる。主は、悪者どもから彼らを解き放ち、彼らを救われる。彼らが主に身を避けるからだ。」

○年老いた人物からの四つの知恵：

さて、きょうの内容に入って行く前に、改めてこれまでに考えてきたことを思い返してみてください。私たちは年老いた信仰者から与えられた実践的な知恵について学んでいました。人生を通してさまざまなことを味わったダビデが、晩年その歩みを振り返って、自身が学んだ大切な真理をここに記してくれていました。ダビデの人生は文字どおり最初から最後までいろいろな困難がつきものでした。敵の攻撃を受けることも、理不尽な理由でのちをねられることも、病を患って床に伏せることもありました。王としての重圧や、貧しさや飢え、罪の深刻さやその罪に対する神様の赦しを味わうこともありました。ダビデは間違いなく、よい時も悪い時もそのどちらをも知っていた人物でした。しかし、そんなダビデはありとあらゆることを経験する中で、主とともに歩み、人生において大切な知恵を学んだのです。彼は心を騒がせるようなひどい悪がはびこる世にあって、どのようにして喜びや平安を見出して生きていくことができるのかということ、自分自身の実際の体験を通して知っていました。だからこそ、今、同じように不安や恐れにあふれているこの世で生きる私たちひとりひとりに対しても、どのようにして歩んでいくべきなのかをはっきりとした知恵として教えてくれていたのです。

そして、そんな彼の遺した実践的な四つの知恵、そのうちの三つを私たちは既に学んできました。

1. 主に信頼して忠実に歩むこと 1-11節

一つ目に見たのは、主に信頼して忠実に歩むことでした。たとえどんな状況に置かれることがあったとしても、はかない、価値のないものに心を奪われ、腹を立てるのではなく、主に身を委ねて、主の前に喜ばれることを忠実にやっていくことが大切だと、ダビデは教えてくれていました。

2. 全体像を正しくとらえて歩むこと 12-20節

また、二つ目に見たのは全体像を正しくとらえて歩むということでした。私たちが周りを見渡してみると、今も神様に逆らっている悪者が繁栄している様子を、確かに目の当たりにすることがあります。そのような姿を見れば、どうして？と疑問を抱いたり、心がざわつくようなことがあります。でもそれらの様子も全体像から考えてみればほんの一部で、もう少し視線を広げて見れば、そんな悪者のことを今も天で笑っておられる主権者なるお方がいることをダビデは教えてくれていました。だからこそ、私たちはこの主にあって恐れや不安を抱く必要はありませんでした。どんな時もすべてを支配されているお方のうちに満足を見出して歩んでいくことができると、ダビデは教えてくれていたのです。

3. 主のあわれみを覚えてあわれみ深く歩むこと 21-29節

そして前回、三つ目に見たのは、主のあわれみを覚えてあわれみ深く歩むことでした。正しい者は時にその信仰のゆえに悪者に憎まれたり、傷つけられたりすることがあります。また、時に自分の手には負えないような試練に直面し、そのような苦しみを覚えれば、落ち込んだり、失意に飲まれてしまったりすることもあるかもしれません。でも私たちの愛する神様は、たとえどんな困難な状況に置かれることがあったとしても、ご自身のものを決して見捨てることはなく、変わらずその歩みをささえてくださるお方でした。この方は決して正しい人を見捨てることはなく、よい時もたとえ悪い時も、どんな時も離れずにいてともに歩んでくださる誠実なお方でした。そしてそんな主の深いあわれみを、主の愛を知っているのであれば、その者は同じようにして、周りの者にも自分が受けたあわれみや愛を表そうとするのです。主のあわれみを覚えて、あわれみ深く歩んでいくことが、主のあわれみや愛を受けた者として、私たちにふさわしい応答なのだと言ったダビデは教えてくれていました。

4. 主の教えと救いに心を留めて歩むこと 30-40節

では、最後四つ目の知恵を見ていきましょう。ダビデが四つ目に教えてくれていた知恵は、主の教えと救いに心を留めて歩むことです。別のことばで言いかえるとすれば、これは自分自身を満たすべきもので満たして、向けるべきものに向けて歩んでいくことです。主の教えに心を留めるということ、主の救いに心を留めるということ、きょうはこの二つのことを考えたいと思います。これが具体的にそれぞれどういうことを意味しているのかをみことばからよく考えてみましょう。

まず30節に「正しい者の口は知恵を語り、その舌は公義を告げる。」と記されていました。ダビデはここでも正しい者の生き方について触れていました。覚えていてほしいのは、「語」と「告げる」という二つの動詞には、どちらもその人物の習慣や特徴を表す時制が用いられていることです。つまり、正しい者の歩みというのは、ことばにおいて、語ることに、告げることに、いつもどんな状況にあろうとも賢く知恵にあふれていると言うのです。ある時は神様に喜ばれることを口にして、ある時は忌み嫌われるようなことを口にするではありません。この人物は主の前に正しいとされることを、ほかの人にとって喜びや益となることをあらゆる場面で語り続けていこうとして歩んでいるのです。それが知恵のある正しい者の生き方の特徴でした。もちろん、そんな正しい者のことばに関する特徴は、ほかの聖書箇所にも繰り返し描かれていました。例えば箴言10:31-32に「:31 正しい者の口は知恵を突らせる。しかしねじれた舌は抜かれる。:32 正しい者のくちびるは好意を、悪者の口はねじれごとを知っている。」とあります。また、同じ箴言12:18では「軽率に話して人を剣で刺すような者がいる。しかし知恵のある人の舌は人をいやす。」と。また箴言だけでなく、伝道者の書の10:12に「知恵ある者が口にすることばは優しく、愚かな者のくちびるはその身を滅ぼす。」とあります。知恵のある者は神様を喜ばせることを話そうとするだけでなく、周りの人にも優しく励ましを与えようとする者としてことばを語る者でした。話すべき時に話すべき適切なことばを、愛をもって真実を口にする、そんな者として正しい者は生きていこうとするのです。

では、ここで少し立ち止まって考えてみてください。ダビデはどんな状況にあっても知恵を語り、公義を告げるのが正しい者の特徴だと教えていました。つまりよい時も悪い時も、その人物のことばは変わらないと言うのです。もちろんダビデは、正しい者が直面する苦しみや困難を知らないわけではありませんでした。今まで私たちが見てきたように、詩篇37篇を通して、神様の前を忠実に歩もうとする者には、それをよく思わない者からの攻撃や迫害があることをダビデほどわかっていた人物はいませんでした。また、今見ている30節以降を見ると、ダビデは正しい者が受けるひどい苦難と苦痛、悪者が繁栄する様子を記しています。例えば32節に「悪者は正しい者を待ち伏せ、彼を殺そうとする」とありますし、35節にも「私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野生の木のようにはびこっていた」とあります。32節で用いられていた「待ち伏せ」ということばには、「見張りをする」とか「警戒して番をする」といった意味が含まれています。当たり前のことだと思えますけれども、見張り番という存在は非常に大きな責任を負っています。敵が迫っていることに見張りが気づかなかつたら、その国やその町は、大変な目に遭うことになるのです。だからこそ、見張りに当たっている者は、ただぼけっと眺めているのではなくて、注意深く目を凝らして、どんな些細な変化にも気づくように目を配っているのです。それと同じように、悪者は正しい者のことを注意深く見ているのです。すきがあれば傷つけて、そのいのちを取ろうとねらっているのです。少しでも責められるような過ちや失敗があれば、その機会を逃すことなく、それを非難するために決して目をそらさないで、熱心に見張っていると言うのです。正しい者の周りには、そんな危険や苦しみがあることをダビデはよくわかっていました。

それを踏まえた上で彼は言うのです。正しい者は、どんな時も知恵を語り、神様や人に喜ばれることを口にする者として生きているのだと。たとえ悪者にいのちをねらわれることがあったとしても、そのことばは変わることがないと。これを聞いて、一体どうしてそんなふうに進めるのだろうかと思いませんか？私たちは果たしてよい時も悪い時も、ことばにおいて変わらない者でしょうか？私たちの口にすることは、いつも神様の前に喜ばれるものでしょうか？自分の予期していないことが起こった時、困難に直面する時、私たちの語ることばは周りの者にとっても励ましや益となるものでしょうか？それとも神様への怒りや不満、周りの者を悲しませたり、傷つけたりするものでしょうか？自分自身が苦しみを味わっている時であれば、思いやりや愛のないことば、感情のままにことばを口にしても問題ないと考えているでしょうか？自分を傷つける者に対してであれば、怒りに任せて応答しても何ら問題がないと思

っているでしょうか？

ヤコブは私たちの舌に関して、明白にこう教えていました。ヤコブ3：9-10に、「9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。」とあります。みことばや賛美とのろいが同じ口から出てくることを決してよしとはしていませんでした。でも、残念ながら私たちは、いろいろな場面でことばによって失敗してしまうことがあります。それぞれ振り返ってみれば、これまでにことばによって神様を悲しませたこと、周りの人を傷つけてしまったことは多々あるでしょう。人に喜びや励ましを与えることのできる力を持った私たちのことばは、同時に人の心を打ち砕いて引き裂くこともできる、そんな恐ろしい力を持ったものになるのです。

1) 主の教えに心を留めて歩むこと 30-31節

では、どうすれば私たちはことばにおいて成長することができるのでしょうか？どうすれば、ダビデがここで描いていたような正しい者のように、どんな時も知恵を語り、義を告げる者として歩み続けることができるのでしょうか？その鍵はもちろんみことばがはっきりと教えてくれていました。そしてその鍵こそがきょうのポイントの一つ目となる主の教えに心を留めて歩むということになるのです。きょうのテキストに、もう一度戻っていただいて、30-31節から見ていくと、「30 正しい者の口は知恵を語り、その舌は公義を告げる。31 心に神のみおしえがあり、彼の歩みはよろけない。」とあります。正しい者がいつも知恵を語ることはできたのは、何も彼のうちに意思の強さがあったからではありませんでした。自分自身の力や知恵によって、話すことばを制御することができていたからでもありません。正しい者がどんな時も神様や人に喜ばれることを口にするのができたのは、その心に神様の御教えが存在したからでした。その心のうちに、主のみことばが根ざしていたからこそ、その人の語ることばは神様の前にも、人に対しても喜ばれるものになったのです。

イエス様もまた私たちのことばと心との関係について、このように述べられていました。ルカ6：45に「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」とあります。イエス様が教えられていたことは明白でした。私たちが話していることばは、私たち自身の心に満ちているものだという事です。自分自身の歩みを振り返って、一番最近神様の前に喜ばれないことを口にしたり、だれかをことばで傷つけたり、悲しませてしまった時のことを思い返してみてください。そのような時に、私たちはどのようにしてその状況に応答していたのでしょうか？あの人や先にあんなことをしたから、自分はひどいことばを口にしてしまったと、真っ先に周りの人や状況を責めていたのでしょうか？自分の置かれた状況を考えたならば仕方がなかったと考えているのでしょうか？もしそう考えているのであれば、イエス様のことばによく耳を傾けてください。確かに周りの人の行動や環境というものがきっかけになったのかもしれませんが、でも、口にしたそのことばは、ただ、あなたの心のうちに満ちているものをあらわにしたにすぎないということです。言い換えれば、私たちが心のうちに不満を抱いていれば、あることがきっかけになって、それが文句やねたまみとなって出てくるのです。もし私たちが怒りや憤りというものをうちに抱えているのであれば、あることがきっかけになって、暴言や中傷といったものになって出てきます。逆に私たちの心に感謝や喜びがあるのであれば、それが賛美や励ましのことばとなって出てくるのです。私たちのことばは、心に満ちているものを表しているに過ぎません。だとすれば、私たちはよく考えないといけません。果たして私たちの心には今何が満ちているのでしょうか？日々の歩みにおいて、果たしてみことばの真理がいつもそこに存在し続けているのでしょうか？ダビデは31節で、正しい者の心には神様の御教えがあり、その歩みはよろけないと言っていました。みことばに従って歩む生き方というのは、ふらついたり、失敗に終わることは決してないと言うのです。

● “心” とは何か？

さて、ここまでみことばを見てきて、主の教えに心を留めるということの重要さがわかったと思います。ダビデは心の中に神の御教えを持っていないといけない、みこころに支配されていないといけないと言っていました。でも、そもそも心に神の御教えがある状態とは一体どういう状態のことでしょうか？もっと言えば、みことばの真理が心のうちに存在している人物とはどんな人でしょうか？それはどんな歩みのことを言うと思います？単にみことばを暗記して、みことばをいつも口にしていて人のことを言うのでしょうか？そのことを考える上で大切になるのは、みことばが心について何を教えているのかを正しく理解することです。私たちはよく心ということばを使います。先週も心の優先順位の話を書きました。心というのは聖書の中でいろいろなところに出てきます。でも、そもそも一体“心”とは何でしょうか？31節で私たちが見た「心」ということばは、旧約聖書の中で約850回登場し、主に人の内側の姿、その人自身を表す意味で用いられています。言いかえれば、心ということばが用いられる時、それはその人の本当の姿を表す場所になります。だからこそ、私たちは外見やふるまいで人を判断していたとしても、神様はその人の本当の姿を現す、その心というものを何よりもご覧になるのです。Iサムエル16：7見ても、主ご自身が「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」と言われていました。

また、人の本当の姿を表す心というものは、少なくとも三つの要素から成り立っていることを聖書のうちから見て取ることができます。

①思考の要素

心は、思考の要素というものを持っています。心というのは、私たちが何かを考え、理解する場所になります。箴言23：6-7に、「:6 貪欲な人の食物を食べるな。彼のごちそうをほしがるな。:7 彼は、心のうちでは勘定ずくだから。あなたに、「食え、飲め」と言っても、その心はあなたとともにない。」と書いています。箴言の著者は言うのです。ある人は一見情け深くて、食べたらいいですよ、飲んだらいいですよと口にするから、気前のよい人物のように見えるかもしれません。でも、それは彼が本当に考えていることとは全く違います。その心の中には自分自身のことばかりがあって、その人の心の考えていることはすべて貪欲なのだ。確かに私たちはいろいろなことを口にしたたり、ふるまったりすることができます。でも、人の本当の姿を表すのは、そんな外側のことばやふるまいではなくて、内側の考えの部分になるのです。

②動機の要素

また二つ目は意思や願い、動機といったものを含んでいるところです。心というのは、私たちが何かを決めたり、何かを願ったりする場所になります。IIコリント9：7でパウロは「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」と言っていました。パウロはコリントの兄弟姉妹たちがそれぞれ自分の心で決めたものを喜んで捧げることが望んでいました。私たちはよい行いというものを間違った正しくない動機ですることでもあります。人の本当の姿は何をしているのかではなく、私たちの意思の部分、私たちの動機の部分、私たちの願いの部分が表すのです。

③感情の要素

そして最後、三つ目の要素は感情です。心というのは、私たちが抱くすべての感情を覚える場所になります。I歴代誌16：10にこう書いていました。「主の聖なる名を誇りとせよ。【主】を慕い求める者の心を喜ばせよ。」と。主を誇りとして主を求める者の心は喜びを抱くことができます。私たちの心は感謝であったり、喜びであったり、悲しみであったり、怒りといったさまざまな感情を覚える部分になるのです。

心というのは、私たちの考えや意思、感情といったものを覚える場所であることをみことばは教えてくれていました。私たちのことばや行動は、そんな心から生まれてきます。心というのはすべての中心

でした。だからこそ、神様は私たち自身を表す心をご覧になるのです。まただからこそ私たちは単なる行動や感情だけで神様を愛しなさいとは教えられていませんでした。みことばは繰り返しこんなことを言います。申命記6：5に「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」、またその後申命記6：6に「私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。」と。みことばは私たちが心を尽くして神様を愛することを求めていますし、主はみことばを単に知識として覚えるだけではなくて、それぞれの心に刻むことを求めています。言いかえれば、私たちは考えにおいても、意思においても、動機においても、感情においても主を愛することが求められるのです。私たちのすべてにおいて、主のみことばに支配されて歩いていくことが求められているのです。

31節の「心に神のみおしえがあ」る人物とは一体どんな人物か——。少なくとも言えることは、その人物の考えも、その人物の意思や動機も、その人物の感情もみことばに支配されている人物だということです。その心にみことばが存在している人物だということです。だとすれば、改めて考えてみてください。果たして私たちの心にはみことばの真理というものがいつも存在しているのでしょうか？私たちの考えや動機や感情、それらの部分はみことばによって支配されているのでしょうか？また、もしそうでないと言うのであれば、一体私たちはどの部分において弱さを覚え、難しさを感じるのか、自分のこととして考えてみてください。例えば、考えや思考の部分において、果たしてどんな時もみことばがそこにあるのでしょうか？私たちはいつもどんなものに自分の考えを赦し、どんなものから影響を受けているかです。皆さんはテレビやスマホでさまざまなニュースを見られるかもしれませんが、それはそれぞれの自由ですけれども、さまざまなニュースを見ている時、あなたはみことばの真理に考えを支配させているのでしょうか？それともそれ以外の、目の前で流れているこの世の出来事に考えを支配させて、恐れや不安に常に支配されていたりするのでしょうか？いろいろなものをネットで検索するような時はどうでしょう？あなたはみことばの真理に思いをめぐらせているのでしょうか？それとも神様の前に喜ばれないものに思いを支配させて、聖さを失っていたりしないのでしょうか？

もちろん罪に汚れたこの世にあっては戦いがあるのです。私たちの考えはいつも誘惑を受けて、いろいろな方向に向いてしまうことがあります。だからこそ、パウロは信仰者が心を留めるべき正しい健全な考えに関して、このように教えていました。ピリピ4：8に「最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。」と。もし私たちが自分自身の考えがみことばに根ざしているのか、みことばに支配されているのかどうかを吟味したければ、このみことばを自分自身に問いかけてみることです。果たして自分の考えは今、真実なものなのかどうか——。真理であるみことばに沿ったものか、それともうそや偽りに左右されているようなものなのでしょうか？果たして私たちの今のこの考えは「誉れある」ものか？「誉れある」ものというのは、賞賛や尊敬されるものということです。私たちの考えていることは、賞賛され、尊敬されるようなものなのでしょうか？果たして自分の考えは今、正しい、清いものなのか、私たちの考えているその考えは、変わらないみことばの教えに基づいているものなのかと。もし私たちの考えを聖い神様をご覧になれるのであれば、神様はその考えを受け入れてくださるか。果たして自分の考えは今、「愛すべき」、「評判の良い」ものなのか。神様だけではありません。もし私たちの周りの人が、あなたのその考えを見るのであれば、その人にとって喜ばれるような、その人がそれを見た時に魅力的で、尊敬を受けるようなものなのでしょうか？私たちは自分自身の考えをみことばによって守らなければいけません。なぜかという、考えていることが、私たちのことばや行動に出てくるからです。

では、一体私たちは自分の考えを、今何によって支配させているのでしょうか？また考えだけではありません。その後も出てきました。意思や願いの部分においてはどうでしょう？私たちが心の中で計画することはどんな時もみことばの教えに沿ったものなのでしょうか？私たちはいつも何を一番に願っていて、

何を一番に求めているでしょう？私たちの心はいろいろな物を欲します。それは食べ物かもしれませんが。お金かもしれませんが。結婚相手や家族かもしれないし、健康や安定した安心な暮らしかもしれませんが。もちろんそれ自体を求めることは何一つ間違っていないです。でも、そのような何かが神様やみことばを求めることよりも、自分にとって重要になっていないでしょうか。重要になっているかどうか、自分にはわかりませんと、もし言われるのであれば、その心には神様にあつての満足があるかどうか考えてみてください。神様があなたに与えたそのものに感謝しているでしょうか？それとも何かを手に入れることができないことに対する不満やいらだちがあるでしょうか？もし私たちのうちに不満やいらだちがあるのであれば、気づいていなくても、あなたは神様やみことば以外の何かを求めているということです。それが満たされていないから不満やいらだちを覚えるようになるのです。かつて詩篇の著者は、119：72で「あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。」と述べていました。果たして私たちはこれと同じように、みことばを何よりも宝として、それによって自分の意思や願いを守っているでしょうか？それとも神様やみことばを何か別のものと置きかえているでしょうか？

そして最後にもう一つ、感情の部分においてはどうでしょう。私たちはみことばによって感情を支配しているでしょうか？それとも逆に、まるで手に負えない暴れ馬のように、感情によって自分自身が支配されていたりするのでしょうか？みことばは自分の心を制することの大切さをはっきりと示していました。箴言25：28に、「自分の心を制することができない人は、城壁のない、打ちこわされた町のようなのだ。」とあります。容易に想像できると思いますけれども、城壁のない町に敵がやって来るようなことがあれば、敵はいとも簡単に入ってきて、その町を手にするようになるのです。私たちも同じだということです。自分の心を制することができなければ、いろいろな罪の誘惑や惑わしに目を奪われて、罪に陥るようになってしまうのです。だからこそ、御霊の実の一つにも“自制”というものがありました。日々の歩みの中にあつて、私たちは感情に支配されていないでしょうか。思いどおりにならなければ、期待が裏切られれば、さまざまな感情を抱くことがあるでしょう。その感情はある人にとっては怒りかもしれませんし、苦い思いやねたみかもしれません。それは心配、失意というものかもしれません。そのような感情に心を奪われてしまうのか、それとも主に拠り頼んで、みことばによって心を守ろうとしているかです。もしそのようなものに心が奪われれば、当然ふるまいにも大きな影響を及ぼすようになります。例えば、人類史上で最初に起きた殺人のことを思い返してみてください。それはカインが弟アベルに対して燃やした怒りによって支配されたからでした。この時、神様は創世記4：6-7に「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。：7 あなたが正しく行つたのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」とカインに警告していたのです。激しい怒りを心に抱いたカインのそばで、罪は確かに待ち伏せして恋い慕っていました。彼はその怒りを抑えて、さらなる罪を犯すことは避けるべきでした。でも感情に支配されてしまったからこそ、彼は怒りを覚え、その怒りは殺人という大きな罪を犯すことになったのです。

感情に支配されるということは、周りの人を傷つけるだけではありません。何よりも神様を悲しませる、そんな罪に陥る危険を自分自身の身にもたらすこととなります。だからこそ、私たちは神様に拠り頼んで、みことばに自分の心を支配させることが欠かせないのです。確かに私たちは考えや動機、感情に関して、弱さや難しさを覚えることがあります。ある時は怒りや憤りというものに支配されてしまって、ことばやふるまいにおいて過ちを犯してしまうことがあるでしょう。どうすればいいのか——。私たちは自分たちの力や知恵によって自分を変えることなど到底できません。だからこそ、私たちの心を変えることのできる生ける神のみことばに心を留め続けることです。私たちは私たちの世界を創造した神様の偉大さや、罪から救ってくださったイエス・キリストのすばらしさのみことばを通して学び続けていくことができます。そんなみことばを私たちが何よりも愛して、心に蓄えて、主の助けを祈り求め

ながら、実際にそれを生きていくことが大切になるのです。私たちは自分自身を満たすべきもので、満たして歩むことが大切になります。そのためには、私たちがどれだけみことばと時間をともにしているかということが大切になります。自分の歩みにとって、どれだけみことばが必要だと私たちが信じているかです。私たちの心を考えや動機や願いにおいて、感情というものを真理に支配させ続けて生きていくことが、私たちにとって大切なことです。私たちに喜びをもたらしてくれる、私たちにとって十分であり、必要なみことばに、どんな時も心を留め続けて生きていくこと、それが一つ目のポイントでした。

2) 主の救いに心を留めて歩むこと 32-40節

残りの箇所ではダビデが言わんとしていたことは、彼がこれまでに何度も触れてきた内容の繰り返しでもあって、またまとめでもありました。そして二つ目のポイントがここにあります。二つ目のポイントは、主の救いに心を留めることです。今まで3回、詩篇37篇を見てきましたが、ダビデはこれまでもこの詩篇を通して、正しい者を主が救ってくださり、幾ら繁栄していたとしても、最後には悪者を滅ぼされることを繰り返し教えられていました。それが揺るがない真理であったからこそ、ダビデ自身を含めて主に従っていく者は、どんな時も希望を持って、その真理のうちに喜びを見出し、忠実に歩んでいくことができたのです。そして、そんなすばらしい約束が32節以降にも繰り返されていました。32-34節に「:32 悪者は正しい者を待ち伏せ、彼を殺そうとする。:33 【主】は、彼をその者の手の中に捨ておかず、彼がさばかれるとき、彼を罪に定められない。:34 【主】を待ち望め。その道を守れ。そうすれば、主はあなたを高く上げて、地を受け継がせてくださる。あなたは悪者が断ち切られるのを見よう。」とありました。悪者は確かにどうにかして正しい者のいのちをねらって、有罪なのだと言え、非難しようとその機会を熱心に探し求めるような者でした。そうやって正しい者は悪者からひどく苦しめられることがあるのです。でも、それも悪者の好き勝手にいつまでも行われるのでは決してありませんでした。主はそんな悪者の手に正しい人を委ねて見捨てるようなことは決してないのです。たとえ人々が不当に非難することがあったとしても、主は彼を罪に定められない、主は無罪として宣言してくださる。正しい者を主は報いてくださる一方、悪者はいつの日か必ず断ち切れ滅ぼされるのです。だからこそ、正しい者はどんな時も忍耐をもって忠実に歩み、揺るがない確信を持って主の働きを期待して生きていくことができるのです。

また続く35節からも「:35 私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野生の木のようにはびこっていた。:36 だが、彼は過ぎ去った。見よ。彼はもういない。私は彼を捜し求めたが見つからなかった。:37 全き人に目を留め、直ぐな人を見よ。平和の人には子孫ができる。:38 しかし、そむく者は、相ともに滅ぼされる。悪者どもの子孫は断ち切られる。」と書かれていました。悪者は確かに一時的に繁栄することがあります。まるでおい茂っている緑豊かな木のように、一見すれば倒されることのないように思える大きな成功をおさめるかもしれません。富にあふれていて、人々の間で名がとどろくこともあるかもしれません。そんな人物の横暴なふるまいによって正しい者が傷つけられてしまうこともあるでしょう。でも、どんなに繁栄しているような悪者であろうとも、いずれどこを探しても見つからないように主によって跡形もなく滅ぼされると言うのです。第二版や第三版の新改訳聖書では、37節、38節の2行目を「平和の人には子孫ができる」、「悪者どもの子孫は断ち切られる」と訳されていたと思います。この「子孫」ということばはもちろんこのまま「子孫」と訳すこともできますけれども、ほかにも「最後」とか「未来」を指す、その意味合いで「終わり」といった意味で訳すことも実はできます。ですから、2017年版の聖書で37節、38節の同じところは「平和の人には未来がある」、「悪しき者どもの未来は断ち切られる」と訳されていました。もしかしたらこちらの方が意味がわかりやすいかもしれません。でも結局のところ言われていることは同じでした。主の前を真っ直ぐに歩む正しい人には未来がある。その一方で、主に背いて歩むような者には、最後には必ず滅びが待っているということです。そのような罪深い歩みや繁栄という

ものは、いつまでも永遠に続くことは決してないのです。公義を愛される正しい主はご自分のものを必ず守られ、ご自分に逆らう者を必ず正しくさばかれるのです。

だからこそ、最後にダビデはこのようにまとめていました。39-40節に「:39 正しい者の救いは、【主】から来る。苦難のときの彼らのとりでは主である。:40 【主】は彼らを助け、彼らを解き放たれる。主は、悪者どもから彼らを解き放ち、彼らを救われる。彼らが主に身を避けるからだ。」とあります。正しい者の救いというのは、一体どこからやって来るのでしょうか？正しい者の守りというのは、一体どこに見出すことができるのでしょうか？正しい者はどこに希望を見出し、喜びや平安を味わうことができるのでしょうか？それはただ主のうちでしかありませんでした。正しい者の救いは自分のうちからやって来るではありません。それは唯一主から来ます。苦難の時の守りは、その人の知恵やその人の力にも、また、周りの状況や人のうちにもありません。そのようなところに、その人に必要な守りはないのです。それは皆である主のうちにあります。ご自身に身を避ける者を悪者から救い出してくださる、そんな偉大な神様に、そんな方のうちに人は喜びを、慰めを、平安を、賛美を見出して歩むことができるのです。

この詩篇を通して学んできたように、主の前を正しく歩もうとする者には苦しみや難しさが当然あります。この詩篇を記したダビデの人生こそまさにそうでした。理不尽な理由で敵に攻撃を受けることも、友の裏切りに遭うことも、病を患って床に伏して死の危険に瀕することもありました。ダビデも完璧ではなかったがゆえに、自分の犯した罪のゆえに子供を失ったことや家族の中で罪が蔓延して、息子にいのちをねられることもありました。果たして自分はこんな状況の中でやっていけるのだろうか？と疑問を抱いて、不安や恐れを覚えてもおかしくないような状況に、彼は人生を通して繰り返し置かれたのです。でも、そのような中で、ダビデは主こそが自分自身の、また正しい者の救いなのだ学びました。

そして皆さん、このすばらしい主は今を生きる私たちにとっても同じ変わらないお方です。私たちはすべてを支配されている力ある主権者に心を留めて、この方において希望を見出して生きていくことができます。私たちは何よりも罪とそのさばきからの救いをこの方のうちに見出すことができました。罪の中に死んでいた私たちにはどうすることもできなかったその問題を、神の御子イエス・キリストが私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださり、墓に葬られた後、約束どおり3日目によみがえることを通して解決してくださいました。そして今、この救い主を自分の主として信じ、受け入れた者は、世の終わりまでいつまでもともにいると約束してくださったこの方と永遠をともにすることができるだけでなく、天に召されるその時までこの地上にあっても、日々をともに歩んでいくことができるのです。だとすれば、私たちが不安や恐れを覚えるような状態に置かれた時に、果たして私たちは一体どこに心を留めるのでしょうか？自分自身を満たすべきもので満ちし、向けるべきものに向けることです。私たちの力では何もできません。主のみことばに心を留めることです。そして何よりも私たちの愛する主ご自身に心を留めて、そして神様を喜ばせる者として、ますます主イエス・キリストに似た者としてみことばを實踐し、助けを祈り求めながら成長する者としてともに歩んで行きましょう。